

# 「21世紀の仏教と私の役割」

駒沢大学大学院生 陳永裕

の中で東洋の精神は疎かにされて、そのような教育の風土は今日まで続いているのである。

また、近代化の激動の時代に、東洋精神は古き良き時代の精神文化としては意義あるものの、近代社会を担える現実的な活力を生み出せないままに、多くの問題を抱えていたことも認めざるをえない。このことは結局、西洋文明の洪水の中で、東洋精神、特に仏教精神はその危機の時代を迎えるようになつたと思われる。そして、その東洋精神の危機からもはや20世紀を振り返つて見ると、東洋精神は西洋文明の氾濫の中で危機の時代であつたと思われる。明治維新を例にして見ても、西洋文明そのものの受用であつたことは否定できない。また、アジア諸国の近代化において、その主役たちは多かれ少なかれ欧米に渡つて、西洋文化を学びそれを用いて自国の近代化を進めてきたことも事実である。そして、近代化を進める中で、特に教育においては西洋教育のそのままの移植といつても過言ではない。この西洋化された教育

紀の終盤に入つて、西洋化された現代社会は西洋文明の功罪を論じられるようになり、新たに多くの問題を私たちに投げかけているのである。私はここで東西の精神文明の優劣を論じようとするのではない。西洋化一辺倒で走りぬいた現代社会に見るその功罪に鑑みて、疎かにされてきた仏教精神の中から、眞の豊かさを取りもどす東洋の心を甦らせたいと思うのである。



西洋の物質文明、東洋の精神文化という表現は語弊があるにしても、18世紀を前後にして西洋社会の急激な物質文明の発展は、精神文化をなおざりにして現代社会を形成して來たのである。この物質文明の発展に精神文化が追い付かなかつたところに、現代精神文化の空白があり、心の喪失の時代といわれるようになつたのである。それに伴つて、物質万能の現実は精神世界の価値を見失う結果を招き、個人主義の進展は他者の存在を軽んずる現状にまで及んだのである。果たして私たちは20世紀の間に何を得て何を失つたのかと問いかけられる。そして、得たものの中には、季節の変化さえも忘れそうな生活環境の快適さとあり余る物の豊かさが挙げられる。しかし、その快適さと豊かさは多くの喪失という犠牲の上に得られたものであることに、やつと気づき始めたのである。個人主義に固められた現代人は、人々との心の交流を通して

ての暖かさを喪失して久しく、あり余る物を作るために、自然環境を破壊して地球規模の公害問題に全人類は直面している。発展の頂点を究めた私たちが、一杯の水を安心して飲むことができず、清らかな自然環境の中で命を育むことができないのならば、何のための発展であったのかを反問せざるをえない。この愚かな発展の道に多くの国々が盲従するのみで、眞の豊かさを考える暇を持つていないのである。

ここで私たちは個人の心に還つて、20世紀を生きて来た己れの姿を省みなければならない。この意味において、東洋の仏教ほど物質方能を戒めて心の豊かさを求め続けて来た宗教精神は外に例がないと思われる。そして、この「かえりみること」を仏教から定義するならば、欲望を静めて智慧による觀察——Samatha—Vipasana——としての「静觀」に外ならない。この静觀こそ現代社会の中に失われて来た東洋

の心であり、仏陀悟りの不变の境地なのである。

人々は「平等」と「平和」のほんとうの在り方については深慮することもなく、ただの合言葉として平等と平和を主張して来たのである。

平等の意味を仏教の經典の中から考えて見ると『法華經』の「常不輕」という言葉で象徴されるであろう。常不輕ということとは經典に登場する菩薩の名前で、その菩薩は「一切の生命はいずれ仏になれる仮性を平等に持つてゐる」という確信から、相手を絶対に軽んじないことを自分との修行の実践德目としたのである。現代社会にこの常不輕菩薩は現れないかも知れないが、自分の中にこの「常不輕の心」を培う時に、仏教でいう平和の根本に立つことができると思うのである。このような平等が成就されていく社会において、仏教が意味する眞の平和の世界は建設される。そしてこの平和——peace——に相当する言葉を、イングの古典では「sānti」と

いい、漢訳仏典では「寂靜」と翻訳されたとい

われる。平和の意味が寂靜という言葉で表された仏典の教えは、眞の平和は「心の寂靜」の中で求められるということでも、現代社会に多くのものを示唆していると思われる。そして、今の私たちが心の平和を求めて寂靜の世界に安心立命するためには、仏教の「靜觀」をおいて外

に道はないとは私は考える。

釈尊は悟りの初めに、寂靜靜觀の中で生命全體の関わり合いの當みに目覚めて、それに目覚めた自分自身を智者であり勝者であり覺者であると宣言したのである。釈尊のこの宣言は傲り高ぶつた救世者としての宣言ではなく、生命の當みに目覚めた智慧觀察者としての宣言であ



る。この宣言の意味を21世紀の佛教者たちは釈尊の教えの根本として吟味しなければならない。

釈尊の佛教は言説を重んずる佛教でもなく、ましてや宗派に捉われた佛教でもない。今日の佛教はこのままでは21世紀の宗教精神を受容することはできない。立っている脚<sup>あし</sup>下<sup>した</sup>は曹洞宗でも日蓮宗でもいいことにしよう。しかし、求るべき精神世界は宗派佛教に遮られてはいけない。私たちは道元を通して釈尊に出会い、釈尊を通して過去仏に出会う。そして、永遠なる如來—tathagata—に出会わなければならぬ。そのためにはまず、諸惡をなすことなく、衆善を奉行し、己<sup>おの</sup>れの心を清めて寂靜觀の世界に安住するところに、21世紀の佛教は帰結しなければならないと思うのである。

ここで、21世紀を生きる佛教者としての私の役割を考えて見ることにしよう。

私は二回の出家を経験している。その最初は10代の時であつたがその後還俗し、26歳に大学を卒業した秋に再出家したのである。再出家した時の私の心を、今も私は忘れてはいない。その出家の初心というのは、全てのことからの放下であった。そして、私の出家の初心は、韓国<sup>ハングル</sup>の比丘尼禪堂の中で培われたが、その禪堂は最初出家の時に小僧として過ごしたところである。第二の故郷として思われるその禪堂に、私は再出家して放下の心を抱いて、10年振りに戻ったのである。大雄殿の本尊は10年前と何の変わりもない姿で満面に微笑みを漂わせ、私の帰りを喜んで下さった。仏典に出る窮子のような私は、本尊の微笑みに出会い、やつと故郷に戻れた安らぎをその時ほど感じたことはない。私はその夜を通して本尊と語り合い、佛教者として生きることを誓つたのである。

それからまた10年余の年月が経つて、現実の

事々に紛れて出家の初心を忘れてしまうこともある。しかしながら、煩惱のどん底に立たされた時にはいつものように出家の初心を思い出して放下の喜びに戻ろうと再発心する。このような私が21世紀を生きる仏教者としてどのような役割を果たすことができるであろうか。

菩薩の行いは「上求菩提。下化衆生」という言葉で象徴されているが、下化衆生というのは「慈悲の実践」という意味に外ならないと思われる。慈悲の実践としての衆生を教化することは衆生と共に歩むことでなければならない。釈尊の教えは命あるものの生老病死の苦惱から出发し、生老病死を解脱して涅槃に入る道の教えである。したがって、慈悲の実践というのは、仏教者がこの生老病死の道を共に歩んで涅槃寂靜の世界に案内することであろう。私はこの「共に歩む」ということの中に、私の仏教者としての役割を見出したいのである。それでは、共に

歩むということはどういう方法によつて実現されるのであろうか。

私はまず、共に歩むことができるよりどころとして修行の道場が必要と思う。人々が家庭や社会をよりどころにして生きているように、仏法は法堂をよりどころにして実践できると思うからである。その法堂を仮に「普光法堂」と名づけて、その中で仏教者は淨信の中で修行し、三衣一鉢の清貧をもつて生活する。そして、その法堂からあらゆる法の光を発散すると同時に、仏教者はつねに共に歩むことを念頭において、生老病死の人々に「同道の友」として手を差し伸べる。私はこの普光法堂を守る者として、人々がどのような時にも普光法堂に入つて真の安らぎを得るように助けることの中で、私の仏教者としての役割を果たしたいと思っている。多くの祖師の伝記を見ると、昔からその時代を仏法の末世と嘆いて結社を作つて精進した

り、新たな道場を建立してその中で道心を一新することによつて、末世の法燈が今まで伝えられたことに注目する。「僧重則法重」という祖師の言葉は一人の仏教者に正伝仏法を頼む先師の心が響いて來るのである。『華嚴經』には「不<sup>住</sup>の道」を説いて、菩薩<sup>が</sup>つねに衆生と共に歩む姿を船頭の川渡しに譬えている。

船頭は

此の岸にも

むこうの岸にも そして

流れの真中にも

住することなく

休まず

人々を渡らしむ

菩薩も船頭のように

生死のこの世にも

涅槃のむこうにも そして

その真中にも

住することなく  
衆生を導いて  
安穏の世界に至らしむ  
と。

私もいづれこの不<sup>住</sup>の道を実践する者として、人々を如来静觀の世界へ案内できることを、私の仏教者としての最後の役割であると念願するのである。

